

# ザルツブルク音楽祭②

## 「声の饗宴」3公演

取材・文 中東生  
Text Shinobu Naka

### バロックを歌ったディドナート

「さすがザルツブルク音楽祭」と満足できるような、3種の声の饗宴を聴いた。

まず8月26日はジョイス・デイドナート。マキシム・エメリヤニチェフがチェンバロで弾き振りするバロック・アンサンブル、イル・ボモ・ドーロをバックにバロック・スタイルを体現した。モンテヴェルディ《ウリッセの帰還》からベネローペのアリアと、日本ではイタリヤ古典歌曲として有名なアントーニオ・チェステイのオペラ《オロンテ》のアリア《私の偶像である人のまわりに》、そしてタルクイーニオ・メルラーのチャッコーナをドラマティックに歌った。モンテヴェルディ《ポツベアの戴冠》ではシンフォニアのあと、オッターヴィアのアリア《さようならローマ》は一人芝居のように劇的だ。ジョーン・ダウランドの英語の歌も説得力が増す。ふたたびモンテヴェルディ《かくも甘い苦惱が》で完璧な無となつて休憩を挟み、後半はハッセル《マルカントニオ（アントニー）とクレオパトラ、セレナータ》とヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》のクレオパトラ、《アリオダンテ》の2曲のアリアで到達した高い芸術性と安定した息の支え、自然な



「天下一品の声」ディドナート  
©Salzburger Festspiele / Marco Borrelli

発声は天下一品だった。

### ネトレブコの ブッチーニ《トスカ》

翌27日はブッチーニ《トスカ》でアンナ・ネトレブコとユシフ・エイヴァゾフ、ルドヴィック・テジエの三者競演を楽しんだ。マルコ・アルミリアート指揮するウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、自由にゆつくり歌うエイヴァゾフにも上手についていったが、そのせいもあり、音楽的サスペンスは感じられない。しかし第1幕幕切れは熱かった。ミヒャエル・シュトゥルミンガーの演出は、アンジェロッティが警官を襲って本物の犯罪者にしたため、オペラの意味も命も軽くなつてしまった。逃亡劇の演技に緊迫感はなく、一命をとりとめたスカルピアが、幕



この夏の話目演目の一つだった、ネトレブコの《トスカ》  
©Salzburger Festspiele / Marco Borrelli

切れでトスカを撃ち殺す。カヴァラドッシの銃殺刑は子供が執行するなど不快だが、児童合唱を効果的に使った部分もあった。ネトレブコは健闘していたが、声はまだ完全にトスカにはまきつていない。テジエのピロドのような声もスカルピア向きではないが好演した。だが、やはりいちばん惹かれたのはエイヴァゾフの伸びる高音だった。

### 会場を沸かせたフローレス

29日はファン・デイエゴ・フローレスがヴィンチェンツォ・スカレーラのピアノで歌った。シューベルトの歌曲《シルヴィアに》、《楽に奇す》、《セレナーデ》では甘さたっぷり、続く《マリニコニア》、《私の偶像よ》、《追憶》ではベッリーニへの理解度の深さを見せた。ロッシーニ



フローレスはいまいちばん「脂の乗っている声」を聴かせた  
©Salzburger Festspiele / Marco Borrelli

《老いの過ち》のピアノ独奏後、《ブルスキーノ氏》と《セミラーミデ》のアリア2曲で、アジアリタと高音を聴かせ、会場を沸かせたところで休憩。

後半は甘さがピツタリのトステイ《夢》、《2回目の朝》、《4月》のあと、ドニゼッティの未完のオペラ《アルバ公爵》（サルヴィ補筆）、ヴェルディ《イエルサレム》、そしてブッチーニ《妖精ヴィツリ》からのアリアを甘く歌いあげ、プログラムが終わった。アンコールはギターの弾き語りで、カンツォーネや南米フォルクローレ、オペレッタ、《誰も寝てはならぬ》（ブッチーニ《トゥーランドット》）まで歌って盛り上がった。やはりいまいちばん脂の乗っているテノールといえるだろう。

**Salzburger Festspiele vol.2,**  
written by Shinobu Naka